(19)日本国特許庁(JP)　(12)公開特許公報(A)　(11)特許出願公開番号
特開2006-247149
(P2006-247149A)
(43)公開日　平成18年9月21日(2006.9.21)

(51)Int.Cl.		F I		テーマコード（参考）
A45B 25/18	(2006.01)	A45B 25/18	F	3B104

審査請求 未請求　請求項の数 9　ＯＬ　（全 10 頁）

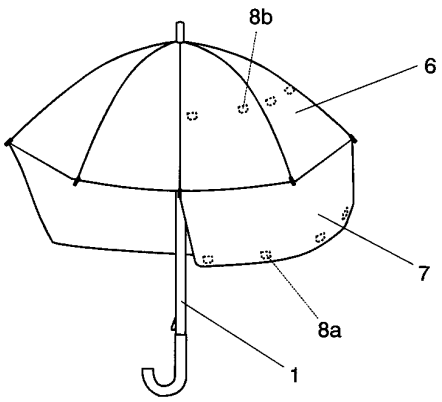
(21)出願番号　特願2005-68301(P2005-68301)
(22)出願日　平成17年3月11日(2005.3.11)

(71)出願人　303004554
土屋　昌弘
大阪府吹田市高野台４丁目４番　Ｂ９３－４０７
(72)発明者　土屋　昌弘
大阪府吹田市高野台４丁目４番　Ｂ９３－４０７

Ｆターム(参考)　3B104 UA01

(54)【発明の名称】傘

(57)【要約】
【課題】傘と別個に付属部品を持ち歩くことなく、雨や日差しから腕や肩、背中などを守ることができる傘を提供する
【解決手段】この傘は、主生地６の周縁に取り付けられた補助生地７を有し、この補助生地７は、主生地６の周縁から垂下する位置から主生地６の内面に沿う位置まで折り返し可能であり、補助生地７の裾部と、補助生地を主生地の内面に折り返したときに前記裾部と対向する主生地６の内面の部位とに、互いに着脱可能なマジックテープ（登録商標）８ａ，８ｂを設け、補助生地７を主生地６の内面に取り付けることができるようにした。
【選択図】図１



【特許請求の範囲】
【請求項１】
中棒と、中棒の先端付近に回動自在に保持された複数の親骨と、各親骨の中間付近に設けられた接続部に一端が回動自在に保持され他端が前記中棒にスライド自在に保持された複数の受骨と、前記親骨の外側を覆うように張られた主生地とを備えた傘であって、
この傘は、前記主生地の周縁に取り付けられた補助生地を有し、この補助生地は、前記主生地の周縁から垂下する位置から前記主生地の内面に沿う位置まで折り返し可能であり、前記補助生地の裾部と、前記補助生地を前記主生地の内面に折り返したときに前記裾部と対向する前記主生地の内面の部位とに、互いに着脱可能な着脱部材を設けたことを特徴とする傘。
【請求項２】
請求項１に記載の傘において、
前記補助生地の裾部は、前記補助生地を前記主生地の内面に折り返したときに、前記接続部よりも外側に位置することを特徴とする。
【請求項３】
請求項１に記載の傘において、
前記補助生地を前記主生地の内面に折り返し、前記着脱部材で前記補助生地を前記主生地の内面に取り付けた状態で前記主生地を閉じたときに、前記受骨と干渉する前記補助生地の裾部の部分に、スリットを設けたことを特徴とする。
【請求項４】
中棒と、中棒の先端付近に回動自在に保持された複数の親骨と、各親骨の中間付近に設けられた接続部に一端が回動自在に保持され他端が前記中棒にスライド自在に保持された複数の受骨と、前記親骨の外側を覆うように張られた主生地とを備えた傘であって、
この傘は、前記主生地の周縁に取り付けられた補助生地を有し、この補助生地は、前記主生地の周縁から垂下する位置から少なくとも縦方向に２つ折りにして前記主生地の内面に沿う位置まで折り返し可能であり、少なくとも縦方向に２つ折りにした時の前記補助生地の裾部と、前記補助生地を前記主生地の内面に折り返したときに前記裾部と対向する前記主生地の内面の部位とに、互いに着脱可能な着脱部材を設けたことを特徴とする傘。
【請求項５】
請求項４に記載の傘において、
前記補助生地を少なくとも縦方向に２つ折りにした時の前記裾部は、前記補助生地を前記主生地の内面に折り返したときに、前記接続部よりも外側に位置することを特徴とする。
【請求項６】
請求項４に記載の傘において、
前記補助生地を少なくとも縦方向に２つ折りにした時に対向する前記補助生地の両面に、互いに着脱可能な着脱部材を設けたことを特徴とする。
【請求項７】
請求項１または４に記載の傘において、
前記補助生地は、前記主生地の周縁を１／２以上、７／８以下覆うことを特徴とする。
【請求項８】
請求項１または４に記載の傘において、
前記傘は、日傘であることを特徴とする。
【請求項９】
請求項１または４に記載の傘において、
前記傘は、雨傘であることを特徴とする。
【発明の詳細な説明】
【技術分野】
【０００１】
この発明は、日傘や雨傘などの傘に関する。
【背景技術】

【０００２】
夏の日差しから顔や体を守るために、日傘が女性に多用されている。従来の日傘では、使用者の顔を日差しから守ることができるものの、露出した腕や肩、首筋などは、太陽の位置等によっては、日差しにさらされてしまうことがあった。
【０００３】
一方、従来の雨傘においても、使用者の顔を雨から守ることができるものの、腕や肩、背中などが濡れてしまうことがあった。
【０００４】
雨傘に関しては、特許文献１では、傘の主生地（傘の親骨の外側に張られた生地）の内面に矩形のエプロン片を取り付けることで、背中が雨に濡れにくくした雨傘を開示している。
【０００５】
【特許文献１】特開２００４－１３５９８５
【発明の開示】
【発明が解決しようとする課題】
【０００６】
しかしながら、上記特許文献１の傘では、エプロン片を使わないときはエプロン片を傘から取り外しておき、エプロン片を使用するときにエプロン片を傘に取り付ける構造のため、エプロン片を常に傘と共に持ち歩く必要があった。また、エプロン片を使用するには、エプロン片を袋から取り出しエプロン片を主生地の内側に取り付けるという作業が必要なため、急に雨が降ってきた時などは、すぐに使用できない恐れがあった。
【０００７】
また、上記特許文献１では、建物の中に一時的に入る時には一時的に傘の内部にエプロン片を収容し、傘を閉じる場面が想定されている。しかしながら、エプロン片の大きさが比較的小さい時は良いものの、エプロン片の大きさが大きいと、傘の内部にエプロン片を収容して傘を閉じようとした時に、傘の内部でエプロン片と受骨とが干渉して、エプロン片が雑然となってしまう恐れがある。従って、上記特許文献１の傘の構造では、一時的に傘の内部にエプロン片を収容することができるものの、エプロン片を傘の内部に収容したまま、傘の主生地を中棒の周りに整然と巻きつけて収納することは困難であった。
【０００８】
本発明は上記問題点に鑑みて為されたものであって、その目的とするところは、傘と別個に付属部品を持ち歩くことなく、日差しや雨から腕や肩、背中などを守ることができる傘を提供することにある。
【課題を解決するための手段】
【０００９】
本発明の傘は、中棒と、中棒の先端付近に回動自在に保持された複数の親骨と、各親骨の中間付近に設けられた接続部に一端が回動自在に保持され他端が前記中棒にスライド自在に保持された複数の受骨と、前記親骨の外側を覆うように張られた主生地とを備えた傘であって、この傘は、前記主生地の周縁に取り付けられた補助生地を有し、この補助生地は、前記主生地の周縁から垂下する位置から前記主生地の内面に沿う位置まで折り返し可能であり、前記補助生地の裾部と、前記補助生地を前記主生地の内面に折り返したときに前記裾部と対向する前記主生地の内面の部位とに、互いに着脱可能な着脱部材（例えば、マジックテープ（登録商標）や、スナップ、ボタンとボタン孔など）を設けている。
【００１０】
従って、本発明の傘（日傘でも雨傘でもよい）においては、前記補助生地を前記主生地の周縁から垂下させれば、前記補助生地によって日差しや雨が遮断され、日差しや雨から使用者の腕や肩、背中などを守ることができ、さらに、前記補助生地を使用しないときは、前記補助生地を前記主生地の内面側に折り返し、着脱部材で補助生地の裾部を主生地の内面に取り付けておけば、従来の傘となんら変わりなく使用することができる。換言すれば、本発明の傘は、日差しが比較的弱い時や小雨の時などは、補助生地を使用せず、従来

の傘と同様に主生地のみを広げて使用し、日差しや雨が強くなってくると主生地の内面から補助生地の裾部を取り外し、補助生地を主生地の周縁から垂下させることで、肩や背中などを日差しや雨から守ることができ、さらに傘を収納するときは、補助生地を主生地の内面に折り返し着脱部材によって主生地の内面に取り付けることで、従来の傘と同様に、主生地を中棒に巻きつけて収納しておくことができる。

【００１１】

つまり、本発明の傘は、傘と別個に付属部品を持ち歩かなくても、雨や日差しから肩や背中などを守ることができる。また、補助生地を使用する時は、補助生地を主生地から取り外すだけでよいので、すぐに補助生地を使用することができる。さらに、補助生地を使用しないときは、補助生地を主生地の内面に折り返し、着脱部材で主生地の内面に取り付けるだけでよいので、片づけも容易である。

【００１２】

好ましくは、前記補助生地の裾部は、前記補助生地を前記主生地の内面に折り返したときに、前記受骨の一端が回動自在に保持される前記接続部よりも外側に位置する。換言すれば、前記補助生地の縦方向の長さは、前記主生地の周縁から前記接続部までの長さ以下に設定される。補助生地の縦方向の長さが長い場合、補助生地を主生地に取り付けた状態で傘を閉じると、傘の受骨と補助生地が干渉し、補助生地が雑然となり、主生地を中棒の周りに整然と巻きつけることができなくなることがわかった。そこで、前記補助生地を前記主生地の内面に折り返したときに、前記補助生地の裾部が前記接続部よりも外側に位置するようにしておけば、補助生地を主生地に取り付けた状態で傘を閉じても、補助生地と受骨とが干渉せず、補助生地をつけたままでも主生地を整然と中棒に巻きつけることができる。

【００１３】

或いは、前記補助生地と受骨との干渉を避けるために、前記主生地を閉じたときに前記受骨と干渉する前記補助生地の裾部に、スリットを設けておくのも好ましい。

【００１４】

補助生地を垂下させたときの縦方向の長さを長くしたい場合は、前記補助生地は、前記主生地の周縁から垂下する位置から、少なくとも縦方向に２つ折りにして前記主生地の内面に沿う位置まで折り返し可能とし、少なくとも縦方向に２つ折りにした時の前記補助生地の裾部と、前記補助生地を前記主生地の内面に折り返したときに前記裾部と対向する前記主生地の内面の部位とに、互いに着脱可能な着脱部材を設ければよい。換言すれば、補助生地を少なくとも２つ折りにした状態で主生地の内面に着脱部材により取り付けておき、補助生地を使用するときは、少なくとも２つ折りにされた補助生地を主生地から取り外し、少なくとも２つ折りにされた補助生地を広げることで、補助生地の長さが長くなり、より広範囲に日差しや雨を防ぐことができる。

【００１５】

この場合も、前記補助生地を少なくとも縦方向に２つ折りにした時の裾部が、前記補助生地を少なくとも縦方向に２つ折りにして前記主生地の内面に折り返したときに、前記親骨の前記接続部よりも外側に位置するようにしておけば、補助生地を主生地に取り付けた状態で傘を閉じても、補助生地と受骨とが干渉せず、補助生地をつけたままでも主生地をきれいに中棒に巻きつけることができる。

【００１６】

また、少なくとも２つ折りにされた前記補助生地が自然に開かないように、前記補助生地を少なくとも２つ折りにした時に対向する前記補助生地の両面に、互いに着脱可能な着脱部材（マジックテープ（登録商標）やスナップ、ボタンとボタン孔など）を設けるのも好ましい。この場合、２つ折りにされた補助生地は自然に開かないので、日差しや雨の強さによって、補助生地を２つ折りにしたままで主生地の周縁から垂下させて使用したり、２つ折りにされた補助生地の着脱部材を外して、補助生地を広げて使用することもできる。

【００１７】

また好ましくは、前記補助生地は、前記主生地の周縁を１／２以上、７／８以下覆う。前記主生地の周縁を１／２以上覆うことにより、使用者の死角となる肩や背中を日差しや雨から防ぐことができる。また通常の傘は親骨が８本で構成されており、７／８以下覆うということは、換言すれば、１／８以上の周縁を補助生地で覆わない、すなわち最低限、隣接する一組の親骨の間は補助生地で覆わないということである。１／８以上の周縁を補助生地で覆わないことにより、使用者の視界を確保することができる。

【発明を実施するための最良の形態】

【００１８】

以下、本発明を図面を用いて詳細に説明する。

（第１の実施形態）

本実施形態では、日傘を例に挙げて説明する。本実施形態の日傘は、図１および図２に示すように、中棒１と、中棒の先端付近に回動自在に保持された８本の親骨２（一部図示省略）と、各親骨２の中間付近に設けられた接続部３に一端が回動自在に保持され他端が中棒１にランナー４を介してスライド自在に保持された８本の受骨５と、親骨２の外側を覆うように張られた主生地６と、主生地６の周縁に取り付けられた補助生地７とからなる。

【００１９】

この日傘は、日差しがきつく日差しから使用者の肩や腕などを守る時は、図１のように補助生地７を主生地６の周縁から垂下させて使用し、補助生地７を使用しないときは、図３に示すように、補助生地７を主生地６の内面に折り返して、後述するようにマジックテープ（登録商標）によって補助生地７を主生地６の内面に取り付けておくことで、従来の傘となんら変わりなく使用することができる。以下、補助生地７について詳細に説明する。

【００２０】

補助生地７は、図４に示すように、略矩形の薄手の生地である。好ましくは、主生地６と共に、ＵＶカット機能を有する。また、美観の点から、レース生地や、表面や周囲に装飾が施されているのも好ましい。また補助生地７の上端縁の長さＬ１は、主生地６の周縁の長さの６／８である。つまり、本実施形態の補助生地７は、８本の親骨２で囲まれた主生地６の８つの面のうち、６つの面を覆うように設定されている。また、補助生地７の縦方向の長さＬ２は、主生地６の周縁から親骨２の接続部３までの長さＬ３（図２参照）より少し短く設定されている。つまり、本実施形態に係る補助生地７は、図５に示すように、補助生地７を主生地６の内面に折り返したときに、補助生地７の裾部が、接続部３よりも外側に位置するようにしている。この理由については後述する。

【００２１】

図４に戻って、補助生地７には、補助生地７の上端縁の長さＬ１を６等分した長さＬ１１毎に、垂直方向に走る山折りの折り目７０と、斜め方向に走る一組の谷折りの折り目７１とがつけられている。上記長さＬ１１は、隣接する２本の親骨で囲まれた主生地６の周縁の長さＬ１１（図２参照）に等しい。さらに、補助生地７の裾部には、一組の折り目７１のそれぞれの外側および両端にマジックテープ（登録商標）のループ面８ａが接着等により取り付けられている。

【００２２】

補助生地７は、図２に示すように、主生地６の周縁に縫合や接着によって取り付けられる。主生地６の周縁に取り付けられた補助生地７は、主生地６の周縁から垂下する位置から主生地６の内面に沿う位置まで折り返し可能となる。また、補助生地７を主生地６の内面に折り返したときに、補助生地７の裾部に取り付けられたマジックテープ（登録商標）のループ面８ａと対向する主生地６の内面には、図２に示すように、マジックテープ（登録商標）のフック面８ｂが接着等により取り付けられている。従って、図５に示すように、補助生地７を主生地６の内面に折り返して、補助生地７の裾部のマジックテープ（登録商標）のループ面８ａと、主生地６のマジックテープ（登録商標）のフック面８ｂとを係合させることによって、補助生地７を主生地６の内面に取り付けることができる。

【００２３】
なお、略矩形の補助生地７を、略円形の主生地６の内面に整然と取り付けためには、補助生地７を主生地の内面に取り付ける際に、図５に示したように、補助生地７の山折りの折り目７０を山折りにし、一組の谷折りの折り目７１のいずれか一方を谷折りにし、二重になった重複部分７２を隣接する親骨２で囲まれた補助生地７とその下の主生地６との間に収納するのが好ましい。
【００２４】
図５のように補助生地７が主生地６の内面に取り付けられた状態にしておくと、この日傘は、従来の日傘とまったく同様に収納することができる。すなわち、ランナー４を下方にスライドさせて主生地６を閉じ、主生地６を中棒１の周囲に整然と巻きつけることができる。ここにおいて、本実施形態の日傘は、補助生地７の縦方向の長さＬ２が主生地６の周縁から接続部３までの長さＬ３より短い、すなわち、補助生地７を主生地６の内面に折り返したときに、補助生地７の裾部が接続部３よりも外側に位置するようにしているので、主生地６を中棒１の周囲に整然と巻きつけることができるのである。つまり、補助生地７を主生地６の内面に折り返したときに、補助生地７の裾部が接続部３よりも内側に位置すると、主生地６を閉じたときに受骨５と補助生地７とが干渉して、補助生地７の裾部が乱雑になり、主生地６が外側に膨れ上がってしまい、主生地６を中棒１の周囲に整然と巻きつけることができなくなる。そこで、本実施形態においては、補助生地７を主生地６の内面に折り返したときに、補助生地７の裾部を接続部３よりも外側に位置させることで、主生地６を閉じても受骨５と補助生地７とが干渉せず、主生地６を中棒１の周囲に整然と巻きつけることができるようにしている。
【００２５】
以上述べた本実施形態の日傘を使用するには、まず従来の傘と同様に、ランナー４を上方にスライドさせて主生地６を広げる（つまり、図３の状態。）。この状態のまま従来の傘と同様に使用することもできるが、日差しがきつくなり腕や肩を日差しから守りたいときには、主生地６の内面から補助生地７を取り外し（すなわち、マジックテープ（登録商標）のループ面８ａとフック面８ｂとを引き離し）、補助生地７を主生地６の周縁から垂下させる（つまり図１の状態。）。その結果、使用者の周囲が補助生地６で覆われて腕や肩が日差しから守られる。なお、補助生地６は主生地７の周縁の６／８しか覆われていないため、使用者の視界も確保できる。日傘を収納するときは、まず補助生地７を主生地６の内面に折り返し、マジックテープ（登録商標）のループ面８ａとフック面８ｂとを互いに係合させて、図５のように補助生地７を主生地６の内面に取り付ける。その後、従来の傘と同様に、主生地６を中棒１の周囲に巻きつけて収納する。
【００２６】
以上述べたように、本実施形態の日傘は、日傘と別個に付属部品を持ち歩くことなく、日差しから腕や肩などを守ることができる。また、補助生地７を使用する時は、補助生地７を主生地６から取り外すだけでよいので、すぐに補助生地７を使用することができる。さらに、補助生地７をしまうときは、補助生地７を主生地６の内面に折り返し、補助生地７をマジックテープ（登録商標）で主生地６の内面に取り付けるだけでよいので、片づけも容易である。また、補助生地７を主生地６に取り付けたまま、主生地６を中棒１の周囲に整然と巻き付けることもできる。
【００２７】
なお、本実施形態では互いに着脱可能な着脱部材として、マジックテープ（登録商標）を用いたが、着脱部材はマジックテープ（登録商標）に限定されるわけではなく、例えば、一対のスナップを補助生地７の裾部と主生地６の内面に取り付けたり、ボタンとボタン孔を補助生地７の裾部と主生地６の内面に設けても良い。
【００２８】
また、本実施形態では、主生地６の周縁の６／８を補助生地７で覆うようにしたが、それに限定されるわけではない。好ましくは、補助生地７は、主生地６の周縁の１／２以上、７／８以下覆う。主生地６の周縁を１／２以上覆うことにより、使用者の死角となる肩

や背中を日差しから防ぐことができる。さらに、１／８以上の周縁を補助生地７で覆わないことにより、使用者の視界を確保することができる。

【００２９】

また、本実施形態では、補助生地７をつけたまま主生地６を整然と中１棒に巻きつけることができるようにするために、補助生地７を主生地６の内面に折り返したときに、補助生地７の裾部が、接続部３よりも外側に位置するようにしていたが、図６に示すように、補助生地７を主生地６の内面に折り返し、補助生地７を主生地６の内面に取り付けた状態で主生地６を閉じたときに受骨５と干渉する補助生地７の裾部の部分に、スリット７３を設けても良い。この場合も、補助生地７を取り付けた状態で主生地６を閉じても、受骨５と補助生地７とが干渉せず、主生地６を中棒１の周囲に整然と巻きつけることができる。

【００３０】

なお本実施形態では日傘を例に挙げたが、同じ構造で、主生地６および補助生地７の素材を変更するだけで、雨傘にも適用できることは言うまでもない。

（第２の実施形態）

本実施形態では、雨傘を例に挙げて説明する。本実施形態の雨傘は、第１の実施形態の日傘と基本的に同じ構造のため、同じ構造の部分には同じ符号を付して説明を省略する。

【００３１】

本実施形態の雨傘を図７～９に示す。この雨傘の主生地６’および補助生地７’は、例えばナイロンやポリエステル、ビニールなどの撥水性を有する素材からできている。本実施形態の補助生地７’は、第１の実施形態の補助生地７に対して約２倍の縦方向の長さを有し、縦方向の略中心に沿って水平方向につけられた折り目７５で縦方向に２つ折りにして、その後、主生地６’の内面に沿う位置まで折り返すことができる。図８に示すように、補助生地７’を縦方向に２つ折りにした時に対向する補助生地の両面には、着脱部材としての第２のマジックテープ（登録商標）のループ面８ｃおよびフック面８ｄが取り付けられており、対応するループ面８ｃとフック面８ｄとを係合させることで、図９に示すように、２つ折りにした補助生地７’が自然に開かないようにすることができる。さらに、必要に応じて２つ折りにした補助生地７’を開くことも容易にできる。

【００３２】

さらに、図９に示すように、補助生地７’を縦方向に２つ折りにした時の補助生地７’の裾部の内面には、第１の実施形態と同様にマジックテープ（登録商標）のループ面８ａが取り付けられており、補助生地７’を主生地６’の内面に折り返したときに前記裾部と対向する主生地６’の内面の部位には、マジックテープ（登録商標）のフック面８ｂが取り付けられている。従って、補助生地７’を縦方向に２つ折りにした後は、第１の実施形態と同様に、補助生地７’を主生地６’の内面に折り返して、マジックテープ（登録商標）のループ面８ａとフック面８ｂとを係合させることで、補助生地７’を主生地６’の内面に取り付けておくことができる。

【００３３】

また、補助生地７’を主生地６’の内面に折り返したときに、縦方向に２つ折りにした補助生地７’の裾部が、接続部３よりも外側に位置するように設定されており、これにより、補助生地７’をつけたまま主生地６’を閉じても、受骨５と補助生地７’とが干渉せず、補助生地７’をつけたままでも、主生地６’を中棒１の周りに整然と巻きつけることができるようになっている。

【００３４】

以上のように構成された本実施形態の雨傘を使用するには、まず従来の傘と同様に、ランナー４を上方にスライドさせて主生地６’を広げる。この状態のまま従来の傘と同様に使用することもできるが、雨がきつくなり腕や肩、背中などを雨から守りたいときには、主生地６’の内面から補助生地７’を取り外し、２つ折りにされた補助生地７’を主生地６’の周縁から垂下させて使用する。さらに雨がきつくなった時や肩や背中をもっと雨から守りたい時は、２つ折りにされた補助生地７’を広げて使用すればよい（つまり、図７の状態。）。傘を収納するときは、まず補助生地７’を縦に２つ折りにし、マジックテー

プ（登録商標）のループ面８ｃとフック面８ｄとを係合させて、補助生地７’が自然に開かないようにする。次に、２つ折りにされた補助生地７’を主生地６’の内面に折り返し、マジックテープ（登録商標）のループ面８ａとフック面８ｂとを互いに係合させて、補助生地７’を主生地６’の内面に取り付ける。その後、従来の傘と同様に、主生地６’を中棒１の周囲に巻きつけて収納する。

【００３５】

以上述べたように、本実施形態の雨傘は、第１の実施形態の傘と比較して、補助生地７’の縦の長さを約２倍にすることができるため、使用者の腕や肩、背中をさらに濡れにくくすることができる。

【００３６】

なお、本実施形態では補助生地７’は縦に２つ折りにして主生地６’の内面に取り付けたが、さらに補助生地７’の長さを長くしたい場合には、縦に３つ、或いはそれ以上に折り返した後に、補助生地７’を主生地６’の内面に取り付ければよい。この場合でも、縦方向に３つ、或いはそれ以上に折られた補助生地７’の裾部が、補助生地７’を主生地６’に折り返した時に、接続部３よりも外側に位置するように設定しておけば、主生地６’を整然と中棒１の周囲に巻き付けることができる。

【００３７】

また、本実施形態においても、互いに着脱可能な着脱部材としてマジックテープ（登録商標）を用いたが、マジックテープ（登録商標）の代わりに、一対のスナップや、ボタンとボタン孔を用いてもよい。

【００３８】

また、本実施形態でも、主生地６の周縁の６／８を補助生地７で覆うようにしたが、それに限定されるわけではない。

【００３９】

また、本実施形態では、雨傘を例に挙げたが、同じ構造で、主生地６’および補助生地７’の素材を変更するだけで、日傘にも適用できることは言うまでもない。

【図面の簡単な説明】

【００４０】

【図１】本発明の第１の実施形態に係る傘の斜視図である。

【図２】同上の傘の内側を下から見上げた状態を示す図である。

【図３】同上の傘において、補助生地を主生地の内面に取り付けた状態を示す図である。

【図４】同上の傘に用いられる補助生地を広げた図である。

【図５】同上の傘において、補助生地を主生地の内面に折りたたんだ状態を説明するための要部拡大図である。

【図６】同上の傘に用いられる補助生地の別の形態を示す図である。

【図７】本発明の第２の実施形態に係る傘の斜視図である。

【図８】同上の傘の内側を下から見上げた状態を示す図である。

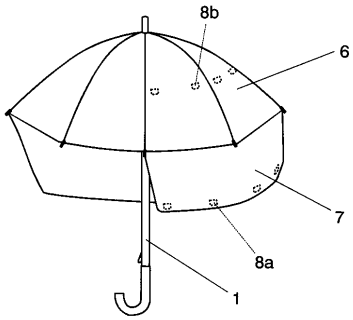
【図９】同上の傘において、補助生地を２つ折りにした状態を示す図である。

【符号の説明】

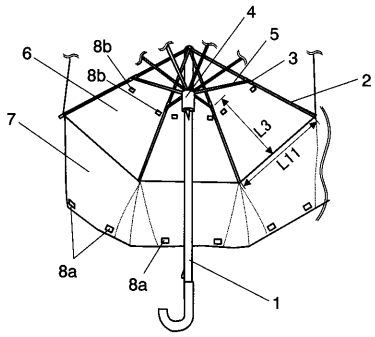
【００４１】

１　中棒
２　親骨
３　接続部
４　ランナー
５　受骨
６　主生地
７　補助生地
８ａ　マジックテープ（登録商標）のループ面
８ｂ　マジックテープ（登録商標）のフック面

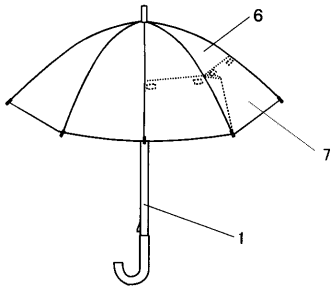
【図１】



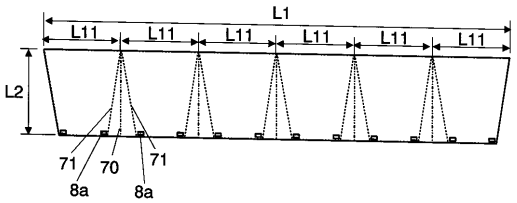
【図２】



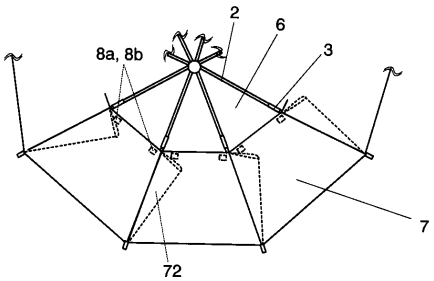
【図３】



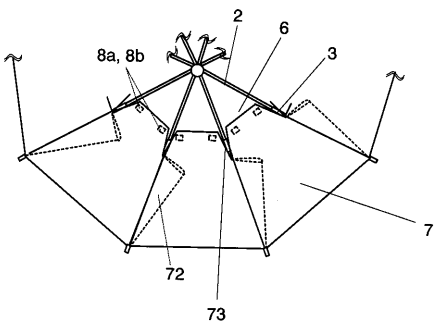
【図４】



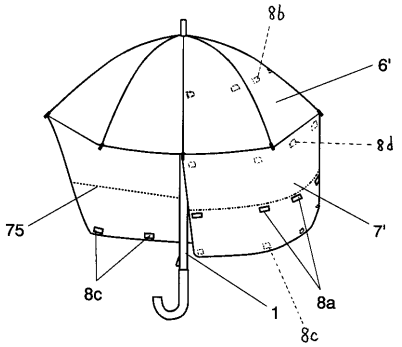
【図５】



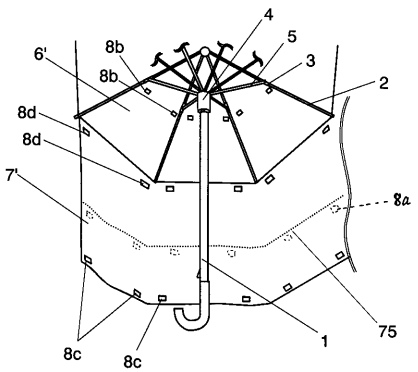
【図６】



【図７】



【図８】



【図９】

